

稀観書展示会開催に向けて

ナポレオンが生涯愛した女性

田端里美

本学図書館では10月16日（水）より、ナポレオン生誕250年記念稀観書展示会を開催いたします。ナポレオンのエジプト遠征における実績については、前回の図書館報で触れさせていただきました。そこで今回は、ナポレオンが生涯愛したとされる女性に焦点を当てたいと思います。

ところで、ナポレオンが二度結婚をしていたということはご存じでしょうか。一度目の結婚は、1796年、ナポレオンが27歳の時に、二度目は、1810年41歳の時でした。そしてここで書かせていただくのは、一度目の結婚相手である「ジョゼフィーヌ」についてです。

ジョゼフィーヌとは、本名をマリー＝ジョゼフ＝ローズ・タッシェ・ド・ラ・パジュリー（Marie-Josèphe Rose Tascher de La Pagerie, 1763-1814）といい、フランス領西インド諸島のマルティニーク島で生まれました。彼女はナポレオンの妻となるより前の16歳の時に、ボーアルネ子爵と最初の結婚をしました。二人の間には二児がもうけられましたが、夫ボーアルネはフランス革命で処刑され、彼女自身も逮捕、監禁されてしまいます。その後、ジョゼフィーヌはテルミドールのクーデタで釈放され、社交界に入ったことがきっかけで、ナポレオンと出会うことになったのです。

ジョゼフィーヌと出会ったナポレオンは、彼女の美貌と魅力に惹かれ、結婚を強く求めました。1796年、ジョゼフィーヌが33歳の時に結婚し、すぐにイタリア遠征へと向かったナポレオンは、ジョゼフィーヌに何通もの手紙を送っていました。ナポレオンから激しい情愛を受け、彼女のことを「やさしくも比類なきジョゼフィーヌ」と呼ぶ一文も見つかっています。

しかし、ジョゼフィーヌはナポレオンがエジプト遠征でフランスを離れている間、絶えず他の男性とも関係を持ちながら商売を成功させることに夢中で、ナポレオンからの手紙にはあまり返事を出していませんでした。そしてついに彼女と多くの情人に関するうわさを知ったナポレオンはジョゼフィーヌとの離婚を決意します。しかし、ジョゼフィーヌの許しを請う姿を見たナポレオンはその決意を鈍らせ、離婚を思いとどまることとなったのです。その後、ジョゼフィーヌはナポレオンの愛情を失うことを恐れて浪費することをやめ、彼を一心に愛し、忠実な妻としての役割を果た

すようになりました。

ところが残念なことに、二人は子宝に恵まれませんでした。皇帝として世継ぎが産まれなければならない立場であったナポレオンは、後ろ髪を引かれる思いで今度こそジョゼフィーヌとの離婚を決断することとなります。1809年の離婚の後も皇后の称号は保たれ、これまで通りマルメゾンの離宮で生活を続けましたが、1814年にわずか50年の生涯を終えることとなりました。ナポレオンはジョゼフィーヌとの離婚の翌年、オーストリア皇女マリー・ルイーゼと結婚し、念願であった子どもを授かりました。

素晴らしい美貌と容姿、格式と上品さなど、ジョゼフィーヌはあらゆる点においてとても魅力的な女性でした。ナポレオンはこうした彼女に今一度会いたいと、セントヘレナ島に流される前に彼女を訪ね、また、彼は亡くなる一週間前にジョゼフィーヌの幻を見ていたといいます。ナポレオンの最後の言葉にも、ジョゼフィーヌのことが語られていたとされるなど、彼が生涯をかけて愛し続けていたのが、ジョゼフィーヌであったことが窺えます。

ナポレオンが英雄視される実績の裏では、彼とジョゼフィーヌの出会いから別れまでの物語が紡がれていたのです。

今秋の稀観書展示会は、ナポレオンのエジプト遠征に焦点を当てたものとなっています。しかしジョゼフィーヌとの間においては、一人の夫として悩みながら歩んできたであろうことに思いを馳せていただきたいと思います。ジョゼフィーヌは妻として至らない部分をもちながらも、ナポレオンの栄光ある生涯を支えていたのが彼女であったことは、確かだと思われます。

ジョゼフィーヌについて調べることで、彼女のようにあらゆる欲望に忠実な女性たちが、フランス革命期の世界で数多く生きていたのだと窺い知ることができました。

■参考文献

- ローラ・フォアマン、エレン・ブルー・フィリップス著；山本史郎訳『ナイルの海戦：ナポレオンとネルソン』原書房、2000年。
- ガリーナ・セブレリャコワ著；西本昭治訳『フランス革命期の女たち』岩波書店、1973年。

たばた さとみ（司書・非常勤職員）